

東広島市長者スクモ塚第1号古墳発掘調査報告 (第5次調査)

野島 永・有松 唯・宇野 真太郎
小出来 恒平・竹田 千紘・森木 琉・Rac, Carmen

1. はじめに

長者スクモ塚古墳群は広島県東広島市西条町御菌宇にある。広島大学考古学研究室では1970年代から2度にわたって当古墳群（第1・2号古墳）の測量調査を行ってきた。その後、再度長者スクモ塚第1号古墳の測量調査を実施し、周辺地形の補測を行った。その結果、第1号古墳の墳丘規模は墳丘長60.0m、後円部は直径40.5～42.5m、高さ6.5～7.5m、前方部は長さ19.5m、幅20.5m、高さ0.75～1.0mほどとなり、短小型の前方部をもつ前方後円墳となることが明らかになった（長者スクモ塚古墳群第1次調査（下江・永野・藤澤2018））。

また、これまで表採されていた埴輪片には、蓋形・家形埴輪と推定できる細片が存在していたこと、それらはおもに墳丘東西のくびれ部近くで表採された可能性があること、円筒埴輪片には円形透孔がみられなかったこと、タガ状の突帯の断面形態が多様であったことなどから、当該古墳の造営時期とともに、埴輪組成とその樹立形態などについても、さらなる究明が必要になると考えるにいたった。

このため、広島大学文学部考古学専攻の実習授業（野外考古学実習A・B・C）として当古墳群の測量調査（第1次調査）に引き続き、第5次調査から長者スクモ塚第1号古墳の墳丘の発掘調査を行った⁽¹⁾。第1号古墳の発掘調査は、2020年9月1日から9月20日までの18日間（野外考古学実習A・B）、および2021年3月25日から4月2日まで8日間（野外考古学実習C）とした（長者スクモ塚古墳群第5次調査）。

長者スクモ塚第1号古墳の墳丘北東側、私有地と国有地の境界には大きな掘削溝が穿たれており、後円部墳丘の一部が失われていた。このため、発掘調査を行い、前方部の前端を確認することによって、およそその墳丘規模を確定することとし、前方部前端の墳丘裾部想定位置に試掘トレンチ（g調査区）を設定した。また、埴輪細片が表採されることが多かったくびれ部の状況も明らかにするために、南東側くびれ部にも試掘トレンチ（h調査区）を設定し、墳丘の構築状況とともに埴輪の樹立位置を確認することとした。（野島・有松）

2. 長者スクモ塚第1号古墳の周辺遺跡

(1) 長者スクモ塚第1号古墳と周辺集落の地理的状況（第1図）

長者スクモ塚古墳群と三ッ城第1号古墳が立地する西条盆地は、広島県東広島市の中心部に位置している。本盆地周辺では、高屋地区の東広島ニュータウン建設や広島大学の移転に伴う宅地開発や道路整備により、古墳をはじめとして集落遺跡などの遺構の検出事例が蓄積

されてきた。才が迫第1号古墳、原の谷古墳、白鳥古墳、千人塚古墳、丸山神社第1号古墳、長者スクモ塚古墳群、三ッ城第1号古墳などが本地域における有力墓として確認されている⁽²⁾。長者スクモ塚古墳群と三ッ城第1号古墳の周辺遺跡について概観する前にこれらの有力墓について既往の発掘調査を参照にしつつ簡潔に整理しておく。

既往の調査から、本地域に立地する有力墓として最初に築造されたのは才が迫第1号古墳と考えられる。箱形石棺と簡略な竪穴式石室が併設された墳丘長11mほどの小型方墳だが、鉄剣や鉄槍、鉄斧、碧玉製玉類など比較的豊富な副葬品がみられた（大上 1993）。出土遺物から古墳時代前葉に位置づけられる。集成編年2期とされる（古瀬 1991）。また同地区に立地する墳丘径23mほどの円墳である原の谷古墳（出野上 2003）は古墳時代前期中葉前後に位置づけられ、集成編年3期に比定される（古瀬 1991）。続く前期後半には白鳥古墳が確認されている。後世の破壊により墳丘形状や規模などは不明だが、仿製三角縁神獣鏡が出土している（松崎 1979、古瀬 1991）。丸山神社第1号古墳は墳丘長42.9mとなる帆立貝形古墳で



第1図 西条盆地周辺の関連遺跡 (1/100,000)

国土地理院ウェブサイト (<https://maps.gsi.go.jp/vector/#12.443/34.433272/132.738384/&ls=hillshade1%2C0.3%7Cvs%2Ctd2&disp=11&d=1>) より転載。

(1. 古市4号遺跡 2. 助平2号遺跡 3. 助平3号遺跡 4. 大槌2号遺跡 5. 古市2号遺跡 6. 浄福寺遺跡 7. 前長者遺跡 8. 長者遺跡 9. 早稲木遺跡 10. 呉水源地穴窯跡北部 11. 呉水源地穴窯跡南部 12. 安芸国分寺跡)

あり（藤野 2015）、壺形埴輪から前期末葉に比定される。千人塚古墳は墳丘径24.0mの円墳で、出土遺物から丸山神社第1号古墳と同じく前期末葉ごろとされる（古瀬編 2010）。これら白鳥古墳、丸山神社第1号古墳、千人塚古墳はともに集成編年では4期前後に比定されているようだが、白鳥古墳、丸山神社第1号古墳については詳細な調査が行われてはいないことから、三者の詳しい先後関係は不明瞭であった（藤野 2015ほか）。

長者スクモ塚古墳群は西条町内の独立した丘陵上（現広島大学西条共同研修センター裏山）に位置しており、周辺低地との比高差は約30mある。現状では、本古墳群は第1号古墳と第2号古墳のみ現存しているようである（下江・永野・藤澤 2018）。築造時期については、『広島県史』では古墳時代中期（5世紀代）（松崎 1979）に、『前方後円墳集成』では広島県北部に点在する帆立貝形古墳との関係から集成6期以降に比定され、三ッ城第1号古墳に後出する（古瀬 1991）と考えられていたが、2018年度の広島大学考古学研究室による円筒埴輪片の考察の結果、築造年代が前期末葉から中期初頭に遡るものと想定され、三ッ城第1号古墳に先行する可能性が指摘された（下江・永野・藤澤 2018）。

長者スクモ塚古墳群の周辺集落遺跡としては長者遺跡・早稲木遺跡が弥生時代から古墳時代にかけての時期に、前長者遺跡が古墳時代にそれぞれ営まれたようだが、前長者遺跡を除いて詳細な存続時期は不明である（濱岡 2020）。前長者遺跡では竈をもつ竪穴建物が3基確認され、その配置から各建物は時期差をもって使用されたと推定されており、遺構に伴って出土した須恵器から、概ね古墳時代後期後半ごろとされる（石井 2006）。長者スクモ塚古墳群の南側には窠跡なども確認されており、窠跡周辺から出土している須恵器・瓦の検討から安芸国分寺への物資供給などの関係も示唆されている（沢元・打田 2007）。

（2）三ッ城古墳と周辺集落の地理的状況（第1・11図）

続いて、西条盆地における古墳と集落について後述するため、三ッ城第1号古墳とその周辺の集落遺跡の空間的分布状況を概観する。まず、三ッ城第1号古墳は、長者スクモ塚古墳群からみて北西方向に位置する鏡山の北方麓に位置し、墳丘長約92.0mを誇る広島県下でも最大規模の前方後円墳のひとつである⁽³⁾。その築造時期は、造出し部から出土した埴輪や須恵器から古墳時代中期前半に位置づけられる（石井・三枝編 2004）。本古墳の周辺には、弥生中期後半から古墳時代にかけての集落遺跡が複数確認されており、三ッ城第1号古墳の南東に位置する古市4号遺跡はそのひとつである。本遺跡からは3基の竪穴建物跡が確認されており、出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて居住地となっていたことがわかる（青山 1992a）。同じように、弥生時代から古墳時代にかけての居住が確認される遺跡として、助平2号遺跡がある。本遺跡では、①弥生時代中期から後期にかけての竪穴建物跡の増加と弥生時代後期から終末期にかけての減少、そして②古墳時代前期から中期にかけての竪穴建物跡の増加と後期にかけての減少、という2度の盛衰がみられる。古墳時代中期には、ミニチュア土器などの祭祀的性格を有する遺物が多く出土したという（植田 1983b、青山 1993）。助平2号遺跡に隣接する助平3号遺跡は、竪穴建物跡が13基、掘立柱建物跡が15軒確認でき、遺跡全体の北東側と南西側の2つのグループに分けられる。出土し

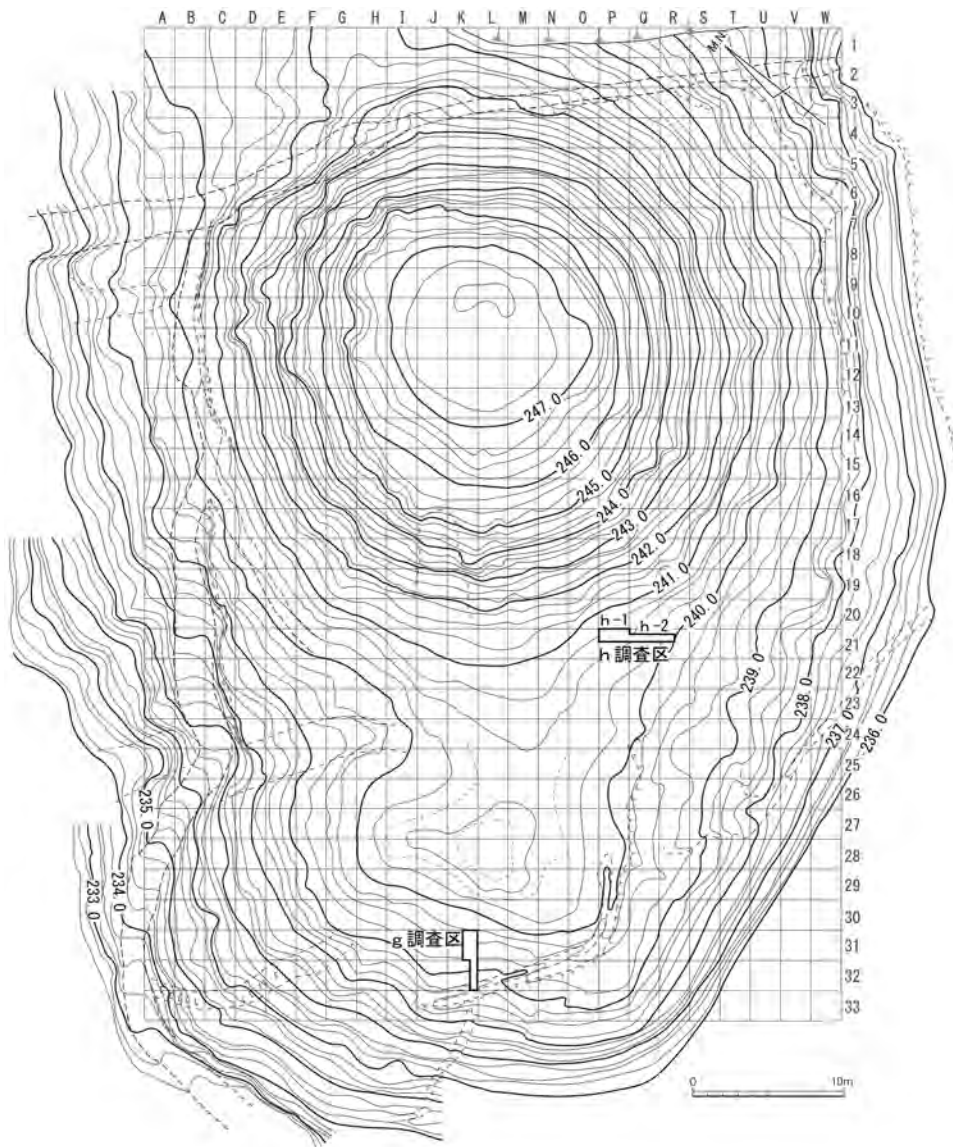
た土師器や須恵器から古墳時代全般にかけて、人の生活の痕跡を確認することができ、古墳時代中期から後期にかけて集落の隆盛がみられる(佐々木・松村 1993)。古市2号遺跡では、竪穴建物跡が5基確認されており、出土遺物から古墳時代中期と後期のものとされる。中期の建物跡からは手づくね土器や鏡形土製品などの祭祀遺物が出土した(青山 1992b)ことが注目できる。同じような祭祀遺物は前述の助平2号遺跡・助平3号遺跡や浄福寺遺跡などでも確認されている。浄福寺遺跡でも、ミニチュア土器や滑石製品などが出土した(伊藤 1984)。この他にも、古墳時代中期前後に比定された遺跡として、大槓2号遺跡がある。本遺跡では、古墳時代中期の竪穴建物跡1基と片袖式の横穴式石室を有する大槓2号古墳が確認されている。本古墳は、副葬品の須恵器から後期後半と考えられており、追葬を行っていたようである。中期後半となる竪穴建物跡と後期後半築造の古墳の存在から、古墳時代中期から後期にかけての生活や人々の集住の様子がわかる(道上・山田 1985b)。(森木)

3. 長者スクモ塚第1号古墳の発掘調査とその経緯

2020年9月は墳形の確認のため、測量調査(下江・永野・藤澤 2018)の結果から前方部前線の墳裾と推定されるg調査区、くびれ部と推定されるh調査区を設定して掘削、盛土堆積土状況の確認を行った(第2図)。2021年3月には、h調査区の土層堆積状況の再確認を行った。そのため昨年調査が行われていた調査区をh-1調査区、その東側⁽⁴⁾にh-2調査区を新たに設定して掘削し、盛土ラインの再確認と埴輪列の検出に努めた⁽⁵⁾。

9月1日から樹木の伐採や墳丘の清掃を開始し、9月2日からは、測量調査により推定された墳丘復元図(下江・永野・藤澤 2018)をもとに墳丘全体に2m四方のグリッドを設定した(第2図)。グリッド東側隅角をグリッド杭とし、東西KとLの間のグリッド・ライン、南北10と11の間のグリッド・ラインの交点(p.K11)を円丘部(後円部)の仮の中心とし、東西(A~W)46m、南北(1~33)66mの方形範囲に設定した。前方部中軸線に沿った基準プラスチック杭(p.K11, p.K29, p.K32)を設置した。9月4日に前方部p.K32の周辺にg調査区設定のための木杭を設置し、g調査区を設定した。9月8日からg調査区の掘削を開始した。また、くびれ部p.Q21にh-1調査区の設定のための木杭を設置し、h-1調査区を設定した。9月10日には、h-1調査区の掘削を開始した。掘削排土に遺物が存在する可能性も考慮し、すべての排土を5mmメッシュで篩った。g調査区、h-1調査区ともに墳丘盛土が確認されたため、順次調査区の平面図、土層断面図を作成した。9月19日までに各調査区の写真撮影を終え、9月20日はg・h-1調査区掘削停止面に20cm角のマイラーフィルム片を置いて、g調査区は排土を篩った土で埋め戻した。また、h-1調査区は今後再確認のため掘り返すことを想定し、花崗岩バイラン土(真砂土)で埋め戻した。

翌年3月25日から4月2日まで、h-1調査区の土層堆積状況の再確認のため、h-1調査区の埋土の除去を行い、円筒埴輪検出のため、東側3mを拡張した(h-2調査区)。h-2調査区東端で円筒埴輪と石列が検出されたため、土層堆積状況の確認と図化を行った。3月26日にはh-2調査区外の石列を確認するため東西両側にピンポールを刺して石列の範



第2図 長者スクモ塚第1号古墳調査区配置図 (1/500)

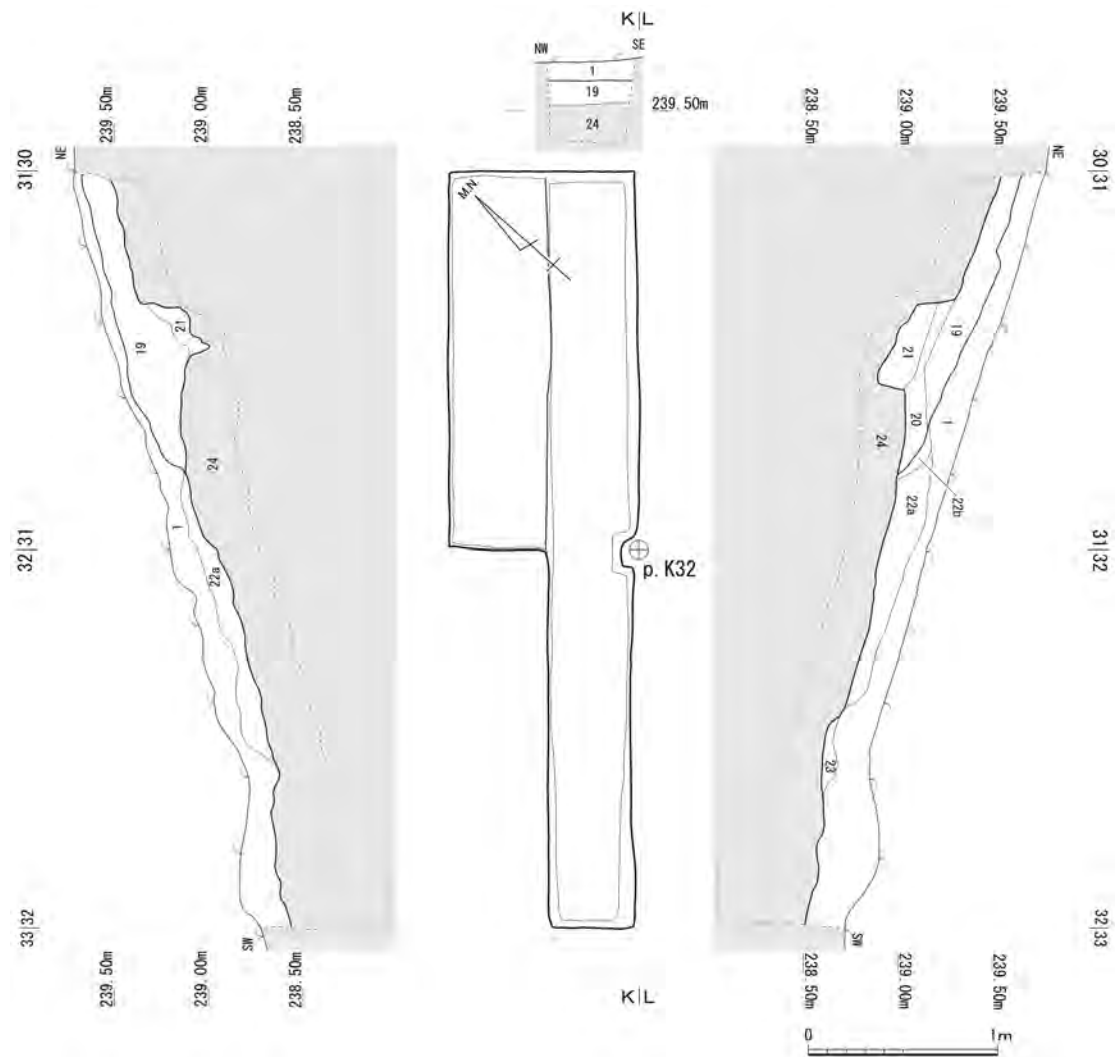
圏を探索した。これにより調査区東西両側に連続する石列が想定されたため、未発掘の石列の位置を平板で記録した。4月2日には、土層断面と3Dスキャン作成用の写真撮影を行い、調査区発掘停止面にマイラーフィルム片を残して、排土と真砂土で埋め戻した。(竹田)

4. 長者スクモ塚第1号古墳の調査区と検出遺構

(1) g 調査区 (図版第1・2a、第3図)

a. 調査区設定

g 調査区は前方部前面墳裾の位置を確定することを目的として設定した。仮定的な墳丘主軸上の p.K32を南端に長さ2m、幅1mの範囲とした。まず表土部分を掘削したが、明確に遺構面と考えられるものは検出できなかったため、g 調査区から南西方向に2m断割りを拡



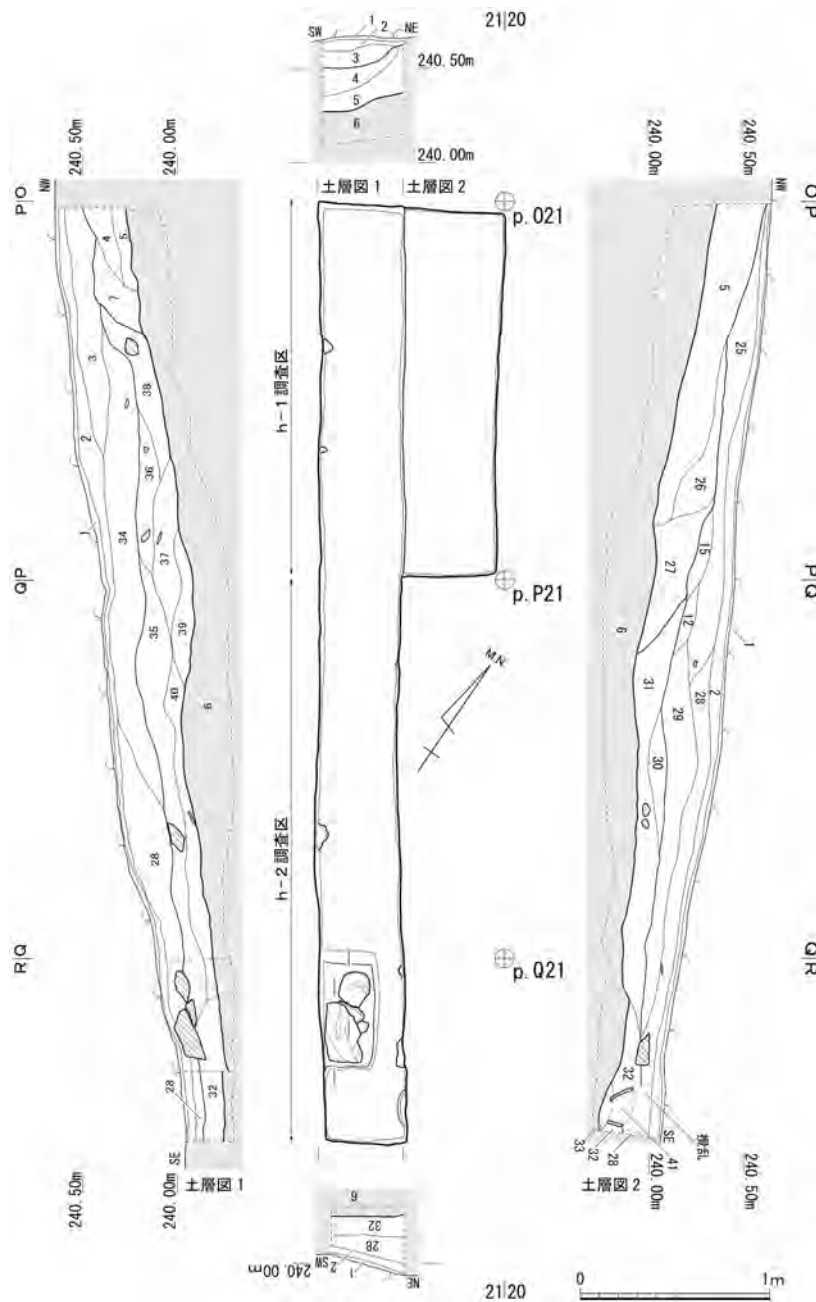
第3図 長者スクモ塚第1号古墳g調査区平面図・土層図（1/40）

張り、都合4m範囲の壁面の土層堆積状況を観察した。

b. 土層堆積状況（図版第1、第3図）

調査区北壁から南に1.60～1.65m付近まで、地山上に赤みを帯びた土層が堆積していた（第19・20層）。色調が地山に類似して締まりが強いため、地山由来の盛土と判断した。この土層より南側では、汚れた盛土流出土（流土）（第22層）が確認され、古墳に伴う土層はみられなかった。盛土下には地山を掘削した「コ」字形の掘形を検出した。この掘形の性格は明らかではないが、内部の土層（第21層）が盛土に酷似しており、古墳築造時に形成されたと考える。なお、埴輪列や原位置を保つ葺石、段築に伴う平坦面などは確認できなかった。

（小出来）



第4図 長者スクモ塚第1号古墳h調査区平面図・土層図 (1/40)

(2) h調査区 (図版第2b・3・4、第4図)

測量調査 (第1次調査) での成果をもとにし、長者スクモ塚第1号古墳のくびれ部の墳丘構造を明らかにするために、h調査区を設定した。

a. 調査区設定

前方部中軸線上となるp.P21に杭を設置し、p.P21を東西に通るグリッドライン上、西側に長さ2m、南側に幅1mのトレンチを設定した。南側に幅0.5mの断割りを行ったが、土層堆積状況の解釈が明確ではなかったため、春季調査において再確認を行った。そして、断割りを行った場所からさらに東側に3m、幅0.5mの断割りを延長した。よって、夏季調査で設定したトレンチをh-1調査区とし、春季調査で新たに設定したトレンチをh-2調査区とした。

b. 土層堆積状況 (図版第3・4、第4図)

h-1調査区 夏季調査においてくびれ部墳丘盛土を確認するために設定し、春季調査において土層堆積状況の再確認を行った。表土 (第1層) 直下には、調査区の全面にわたって盛土流出土 (第3・15・25・34層) が堆積している。流出土の下には、盛土 (第4・5・7層、第26・27層) および、墳丘構築後の整地土 (第35~39層) と考えられる土層が確認され、その下では全面で地山 (第6層) が確認された。

h-2調査区 夏季調査の成果をもとに、春季調査において埴輪列の存在を確認するために設定した。表土 (第1層) の下には、全面にわたって盛土流出土 (第12・15・25・28・29・

34層）が堆積しており、流土の下に整地土（第30・31・35・39・40層）と盛土（第27層）、検出した円筒埴輪の下部を固定するための置土（第32・33層）と考えられる層が確認され、その直下では地山（第6層）を確認した。

（3）検出遺構（図版第1b・3a・4、第3・4図）

g調査区では、地山土を多く含む盛土層が堆積していた。盛土層は測量調査で想定された推定墳丘復元図に沿う形で確認された（図版第1b）。

次にh-2調査区東端では、円筒埴輪が据えられ、礫が配置されていたことが確認できた（図版第3a・4）。埴輪の掘形は地山を浅くわずかに掘りくぼめた場所に置土（第4図第32層）をして据え、埴輪下端部固定のための置土（第33層）で充填していた。埴輪内部には第41層を埋め込んでいたと考えられる（図版第4b）⁽⁶⁾。埴輪列自体は検出できてはいないことから、埴輪間の間隔や埴輪列の構造などの詳細は不明である。そして、礫に関しては現状、列石状に連なる状態を呈していたということが想定できる⁽⁷⁾。また、それらの構築順序は、まず墳丘盛土（第4・5・7・26・27層）と埴輪を据え、置土を施し、埴輪を設置・固定していた。置土と最初に構築された墳丘盛土の間にさらに整地土（2度目の盛土か）（第30・31層、第35～40層）を上乗せして、礫を配置したという順序が想定できる。整地土（第30・31層、第35～40層）には円筒埴輪片などが含まれており、最初に円筒埴輪を設置した時期と、礫を配置した時期にはかなりの時間差が生じていた可能性を指摘できる。また、最初に構築された墳丘盛土（第4・5・7・26・27層）は西から東に向けて墳丘外側に膨らむように弧を描く平面形態であることから、くびれ部に近い後円部裾部であることが推定できる。

以上のことを踏まえると、現状ではくびれ部付近では埴輪列、および列石が廻っていたと想定できるが、埴輪列や埴輪列外側に関わる造成について、また埴輪片が含まれていた整地土の解釈に関してはこれからの課題といえる。（宇野）

5. 表採遺物・出土遺物とその年代（図版第5・6、第5～7図）

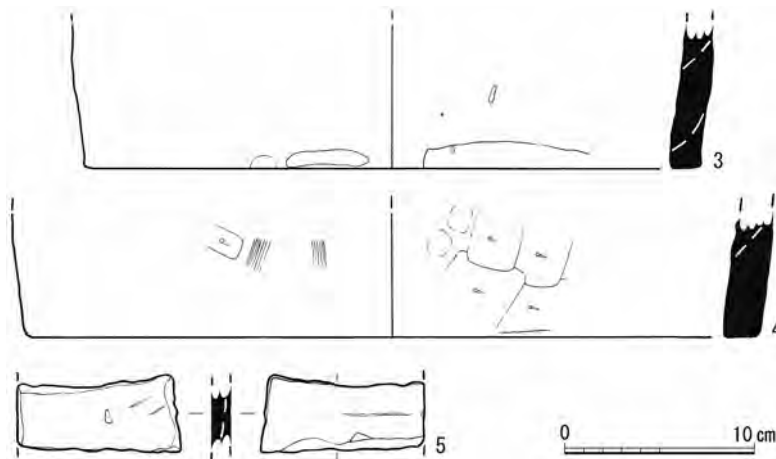
夏期調査出土遺物は26点であり、このうちg調査区は2点、h-1調査区は24点である。春期調査出土遺物は37点であり、全てh-2調査区から出土した。このうち図化できた15点と、第3次調査で表採された円筒埴輪片1点（10）を掲載した。6～9・16・19や図化できなかった円筒埴輪小破片の多くは整地土層（第4図第30・31層、第35～40層）から出土した。そのほか1・2・11～15・17・18については、初期の墳丘盛土、あるいは整地土層より上層に堆積した流出土層からの出土である。加えて2018年報告（下江・永野・藤澤 2018）掲載の埴輪片3点（3～5）の観察に関する訂正を行う（第6図）。3・4・5はそれぞれ2018年報告（下江・永野・藤澤 2018）に掲載した第7図13・15・14である。

（1）土師器（図版第5b、第5図）

1は胴部片である。調整は表面摩滅のため確認できない。焼成は良好である。胎土は明黄褐色を呈し、2mm程度の黒色・無色鉱物を含む。2は口縁部片である。口縁部内面にナゲが施されている。焼成は良好である。胎土は精製されているとみられ、黄橙色を呈し、1



第5図 長者スクモ塚第1号古墳出土土師器 (1/3)



第6図 長者スクモ塚第1号古墳出土土円筒埴輪 (1/4)

mm程度の白色・無色鉱物を含む。

(2) 埴輪 (図版第5・6、第6・7図)

円筒埴輪 円筒埴輪片は16点である。いずれも部分的な破片で完形に復元することができないため、それぞれの部位や要素ごとに特徴を述べる。

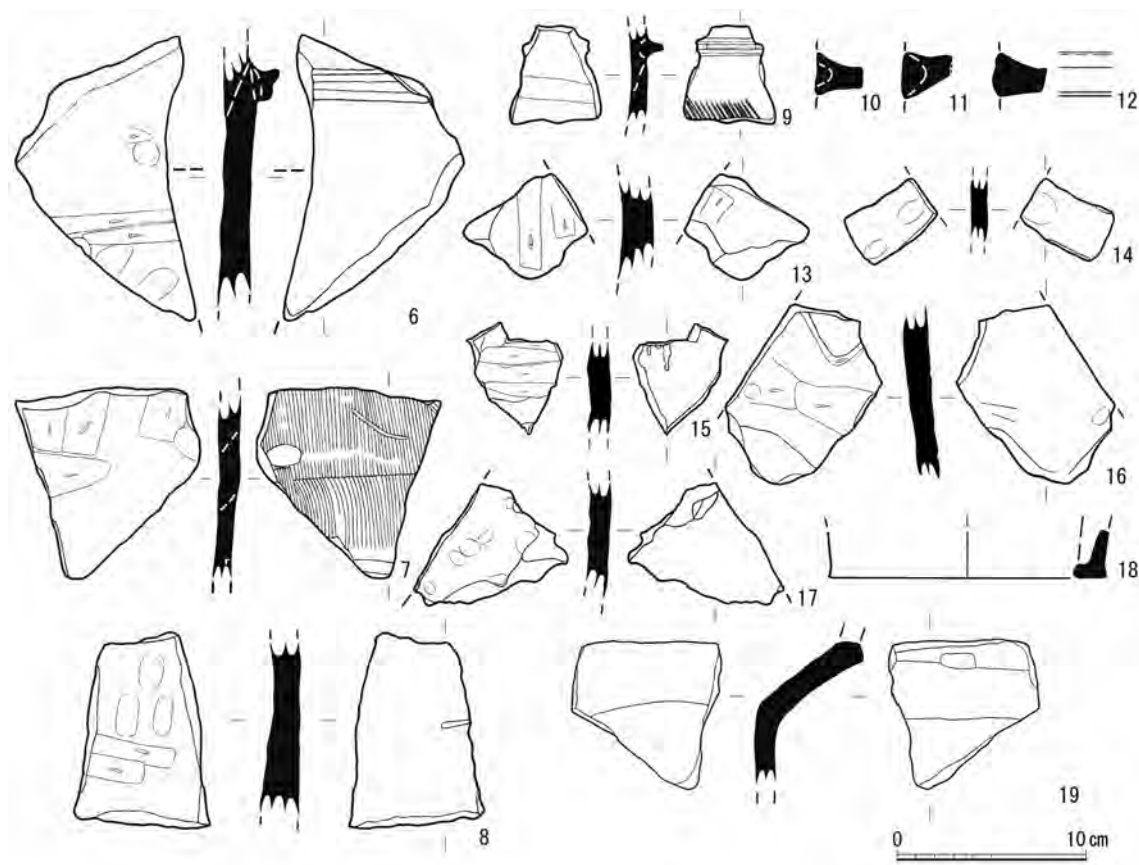
胴部片は13点ある(5～17)。方形透孔(5)と三角形透孔(6・13・14・16・17)がある。5は透孔付近に短小な沈線があり、透孔の割り付け痕跡の可能性はある。突帯をもつものは5点ある(6・9・10～12)。6・10・11の突帯は、器壁に粘土紐を貼り付けた後、それを包み込むように別の粘土紐を貼り付けている状況が看取される。また7・16は突帯が付いていた痕跡がある。底部片は3点ある(3・4・18)。18は粘土紐接合部に沿って剥離した痕跡が認められる。

以上16点の円筒埴輪片の調整に関しては、ナデやオサエなどがみられるほか、7・9は外面にタテハケが施されている。また15・17は外面に黒斑がある。どの個体も焼成は良好である。胎土に関しては、にぶい黄橙色や橙色を呈するものが多く、1～3mm程度の黒色・白色・無色鉱物が含まれている。

朝顔形埴輪 19は朝顔形埴輪片である。明瞭な屈曲部を持ち、口縁部基部の破片の可能性はある。端部には接合痕跡がある面をもつ。調整は表面摩滅のため確認できない。焼成は良好である。胎土は黄橙色を呈し、2mm程度の黒色・白色・無色鉱物を含む。

(3) 年代

本報告および2018年度報告(下江・永野・藤澤 2018)掲載の埴輪を合わせると、本古墳



第7図 長者スクモ塚第1号古墳出土埴輪類 (1/4)

の埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪がある。このうち円筒埴輪は、黒斑があり、円形透孔がみられず、外面調整にタテハケやナデを用いている。これらのことから、埴輪の年代は川西編年Ⅱ期（川西 1978）、廣瀬編年ではⅡ期（廣瀬 2010）に属すると考えられ、集成編年3～4期（広瀬 1991）、古墳時代前期後半にまで遡る可能性が高いといえよう⁽⁸⁾。（小出来）

6. 長者スクモ塚第1号古墳の調査成果と関連課題

(1) 埴輪の組成と周辺古墳との比較

長者スクモ塚第1号古墳表採・出土埴輪を概観すると、円筒埴輪片の突帯部分については、精製された胎土を使用したものが存在する。断面形状に関しては、M字状を呈するもの、台形状を呈するもの、高くつまみ出しているものがある。また胴部片に関しても、器壁の厚さは様々であり、胎土の違いも明瞭に見受けられる。残存率が低いため正確を期することはできないが、推定される円筒埴輪の直径にも大小の差が存在する。すなわち大型品と小型品が混在しているのである。このような胎土、器壁の厚さ、埴輪の大きさにみられる埴輪の作りの差異が製作者、あるいは製作者集団の差を反映している可能性がある。より良好な資料が得られれば、さらに分析を深化させることができるであろう。

以上のことに関連して、本古墳から直線距離で約2kmと近接して位置する三ッ城第1号古墳（石井・三枝編 2004）には、外面調整や口縁部形態などの特徴がそれぞれ異なる2群の円筒埴輪が存在する。また、近隣地域の事例ではあるが、山口県柳井茶白山古墳においても、器形や製作技法などによって2群に分離できることが指摘されている（廣瀬 2003）。今後の資料の増加を待たなければならないが、これら2古墳の埴輪供給状況からみると、長者スクモ塚第1号古墳においても異系統の円筒埴輪が共存する可能性について考慮しておく必要がある。

また、安芸および備後地域において、本古墳と近い時期に築造された可能性のある古墳として、安芸高田市甲立第1号古墳（川尻・沖田編 2015）や三次市宮の本第24号古墳（梅本編 2013）が挙げられる。前者の円筒埴輪は、外面2次調整にヨコナデを多用することが指摘されている（安川 2018）。長者スクモ塚第1号古墳の円筒埴輪をみると、破片資料であるため推定ではあるが、ヨコナデを施すものが比較的多くみられ、両古墳の円筒埴輪が類似した特徴をもつことが指摘できる。しかし一方で、長者スクモ塚第1号古墳では円形透孔がみられないことから、甲立第1号古墳よりも古い様相を示している可能性があるだろう。（小出来）

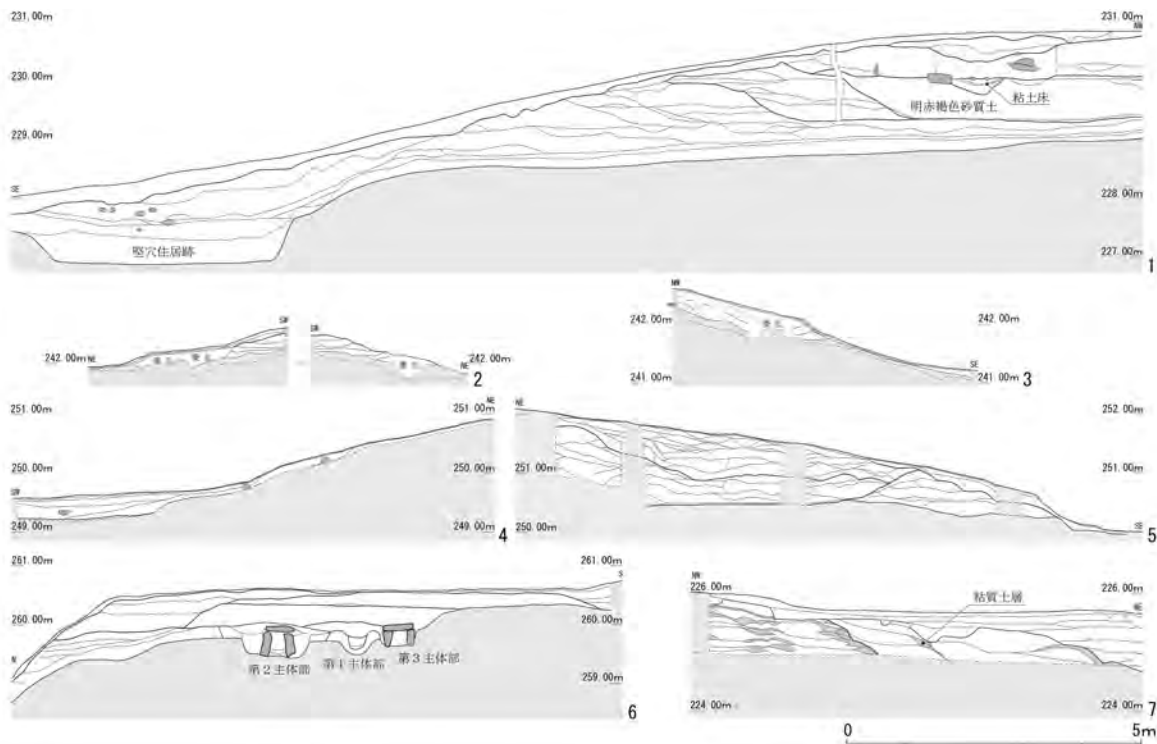
（2）西条盆地周辺の調査事例からみた墳丘構造

長者スクモ塚第1号古墳における墳丘構造の解明を目的とした発掘調査を実施する前に、西条盆地周辺における前・中期古墳の墳丘構築の具体像を確認しておきたい。

西条盆地における有力墓を中心とした墳墓の動態を解明するにあたって、青木敬氏による墳丘構築方法（青木 2003）の分類を援用する。青木氏は前期古墳について、土手（土提）状盛土を施し、平坦面を作るグループ（「西日本的工法」と、明確な平坦面を造らず、小丘に盛土を追加するグループ（「東日本的工法」）に大別した。また、中期古墳における土嚢積み工法⁹⁾の出現、中小規模の円墳・方墳にも土手（土提）状盛土工法の導入が検討できるとした。

和田晴吾氏も墳丘を築き、墓壙を掘り、棺を据えつけ、遺体を納めるという手順に墳丘盛土による平坦面が必要であるとしている（和田 2009）。墳丘構築には、埋葬施設の設置が構築手順のどの段階に組み込まれているのかといった視点も必要となる。また、墳丘構築方法とともに構築上のどの段階で埋葬が実施されたのかを検証するために、「墳丘後行型」、「同時進行型」、「墳丘先行型」の各分類についても確認しておきたい（和田 2009）。ここでは地山、あるいは墳丘盛土下層を掘り込んで墓壙を構築する「墳丘後行型」、地山を整地し、盛土を施してから墓壙を掘削、あるいは盛土で墓壙を構築し、埋葬を繰り返す「同時進行型」、盛土を構築し墳丘をおおよそ形成した後に墓壙を掘削し、埋葬後にわずかな封土を施す「墳丘先行型」を想定しておきたい。以下に西条盆地およびその周辺において墳丘構築方法がある程度判明した事例を概観する。

才が迫古墳 古墳時代前期前葉に属する才が迫古墳は、墳丘10m足らずの小規模な方墳である（大上 1993）。墳丘が削平されていたため、埋葬後の墳丘構築状況が不明なものの、尾根地形の整形後に墓壙を掘削し、箱形石棺や簡易な竪穴式石室を並列させて設置した後に、墳



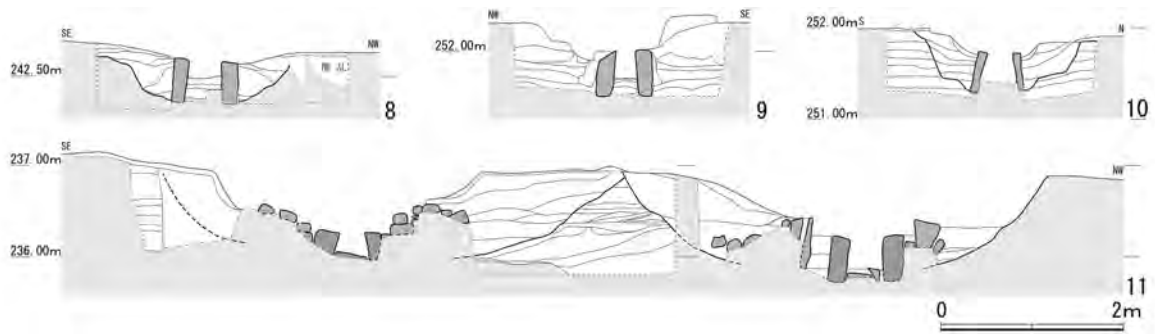
第8図 西条盆地における諸古墳の墳丘土層図 (1/125)

(1. 原の谷古墳 2・3. 長者スクモ塚第2号古墳 4・5. 千人塚古墳 6. 蛇迫第1号古墳
 7. 三ッ城第1号古墳)

丘を構築していたようである。埋葬施設を封じた盛土（封土）はそれほど多くはなかったとみられる。後述する蛇迫第1号古墳同様に、西条盆地周辺の箱形石棺などを埋葬施設とする小規模墳にあつては、墳丘後行型は連続と存続していたとみてよい。

原の谷古墳（第8図1） 前期前半から中葉を前後する時期に築造された23.5mの方墳である（出野上 2003）。まず、地山上面に墳丘全体を覆う基礎土層に整地を行う。その後、墳丘外縁部に土堤状盛土を施す。標高230.0mほどまで墳丘南側から順次北側に積み上げた後に、墳丘中央部に単一土層（明赤褐色砂質土）を一気に積み上げ平坦面を造り出す。この平坦面上に粘土床を設置し、両側に基底石を配置して壁体割石板材を積み上げ、竪穴式石室を構築した。石室は基底部を除いて壁体がほぼ破壊された状態で検出されたため、石室上部はかなり攪乱されていたようである。竪穴式石室の高さを1.0mとして復元した場合、墳丘最上部を超えることから、おそらく石室構築後、粘土被覆を施し、薄い墳丘表土を盛った可能性が高い。埋葬施設の設置は墳丘構築のほぼ最終段階であったとみられる。

原の谷古墳の墳丘構築手順としては、地山削り出しによる整地（第1工程）、墳丘外縁部に土堤状盛土を施し（第2工程）、中心部分に平坦面を形成した（第3工程）後に、竪穴式石室を埋設し、薄い封土で墳丘を成形した（第4工程）とできる。土堤状盛土を墳丘構築の主要工法としていることから「西日本の工法」が採用されていたといえる。また、主要盛土を構築した後に埋葬施設を設置していたことから、墳丘先行型に分類できよう。



第9図 西条盆地における諸古墳の埋葬施設土層図 (1/80)

(8. 長者スクモ塚第2号古墳石棺 ST01 9. 千人塚古墳第1号石棺 10. 千人塚古墳第2号石棺
11. 三ッ城第1号古墳第1号埋葬施設〈左側〉・第2号埋葬施設〈右側〉)

藤が迫第1号古墳 西条盆地の北西、飯田盆地にあった藤が迫第1号古墳は直径15mほどの円墳であったとみられる(河瀬 1971)。内法長さ3.1m、幅0.8m、推定深さ1.0m以上となる竪穴式石室をもつが、埋葬施設の遺存状況が悪く、基底部分と壁体の割石板材、礫敷きの棺底面の一部が確認されたのみであった。原位置を示す明確な出土遺物がみられないものの、古墳時代前期となる可能性が高い(藤野 2015)。竪穴式石室を載せた基底面下層の墳丘外縁部は、「褐色の粘土層がところどころにレンズ状に堆積している」(河瀬 1971、82頁第11図)と記述される。挿図からは、整地後墳丘外縁部に土提状の盛土を施し、中心部分に水平積みの盛土を堆積させたと読み取ることができる。竪穴式石室の構築に際して、墳丘中心部に水平積みの基底面を造り上げていたとみてよかろう。遺存状況は悪いものの、基底面および構築墓壇の造成、長さ3m、深さ1mを超える竪穴式石室の埋設からすれば、当該地域における有力墓とみることができる。

長者スクモ塚第2号古墳(第8図2・3、第9図8) 直径17mほどの小規模な円墳である⁽¹⁰⁾。出土遺物の詳細が不明なため、時期判断が困難であるが、埋葬施設からみれば、前期後葉を前後する時期を想定しておきたい。小規模な墳丘であるせいか、盛土の土台となるような平坦な整地面は形成されてはいない。南東側の地山を削り出し、北東側の地山に上乘せするような盛土を施していたようである(第8図2・3)。箱形石棺 ST01(第9図8)を埋置した後、木棺直葬墓 ST02の設置に際してさらに盛土を施したとみられる。

盗掘による攪乱が著しいものの、盛土である程度平坦な堆積層を作り出し(第1工程)、墓壇掘削後に箱形石棺 ST01を埋置し(第2工程)、さらなる盛土を積み上げて木棺直葬墓 ST02の埋葬(第3工程)を行い、最終的な封土により墳丘を成形した(第4工程)と想定することができる。箱形石棺 ST01以前に埋置された埋葬施設があった可能性が高く、第2工程が繰り返されたとみてよい。よって、墳丘構築には「西日本の工法」を採用せず、墳丘構築とともに埋葬が繰り返される同時進行型であった。

千人塚古墳(第8図4・5、第9図9・10) 前期末葉前後、集成編年4期(古瀬 1991)に築造されたもので、全長30mほどの帆立貝形古墳か、直径24mの円墳とされる(古瀬編 2010)。墳丘を十字に断ち割るようにトレンチを設定しており、西側トレンチ(第8図4)

では、墳裾の地山面の一部を平坦に削平して整地する。盛土の築造に関わる最初の工程として、東側トレンチでみられるように地山を整地した後、墳丘外縁部に土提状盛土を施す(第8図5)。次に、その内側に盛土を水平に積み上げるものの、墳丘中央部ではやや高く盛りながら小丘を造り上げていく。中央部盛土を積み上げつつ第1号石棺の石材を配置し、棺外面に粘土を貼り上げ、周囲に盛土を積み上げていったものとみられる(第9図9)。つまり、第1号石棺埋置後に墳丘上半部が形成されていったことを示している。墳丘中心から東側にややずれた位置で検出した第2号石棺は第1号石棺よりも少し低い位置に設置されていた(第9図10)。第1号石棺よりも小ぶりの割石材を組み合わせており、水平に積まれた盛土層の構築後に墓壇を掘削して石棺を設置していたことから、第1号石棺埋置後、最終的な盛土の後に埋置された周辺埋葬施設とみられる。水平積みによる基底面を造成して竪穴式石室を構築した原の谷古墳や藤が迫第1号古墳とはまったく異なる様相をみせている。

千人塚古墳の墳丘構築手順としては、以下のようになろう。まず、地山面を平坦にし(第1工程)、墳丘外縁部に土提状盛土を施す(第2工程)。中心部分には小丘のように積み上げた盛土を施し、第1号石棺の土台となる小さな平坦面を形成する(第3工程)。小丘頂部の盛土は第1号石棺よりも高いレベルまで堆積していたことから、この時点で第1号石棺を埋置していた可能性が高い。その後、墳丘周囲の土提状盛土内側を別の盛土で充填し(第4工程)、墳丘全体を作り終えた後に第2号石棺の墓壇を再掘削・埋置して埋葬を完了し、薄い封土で成形した(第5工程)ことになる。墳丘周囲に土提状盛土を構築していることから、「西日本の工法」が採用されてはいるが、水平積みといった盛土工法を採用してはいない。墳丘構築の途中で埋葬施設を設置しており、かつ墳丘構築後にも埋葬施設を追加していたことから、同時進行型であったといえる。

蛇迫第1号古墳(第8図6) 前期末葉から中期初頭頃とされる直径10mほどの小規模な円墳である。尾根筋に直交するように墳丘南側斜面を削平、整地している(恵谷 2005)。埋葬施設の設置にあわせて、北側墳丘に平坦面を増設したようにみえる。粘土床をもつ木棺直葬墓(第1主体部)を設置した後に、その北側に隣接して墓壇を掘削し、箱形石棺(第2主体部)を設置して被覆し、両主体部をさらに黄褐色粘質土で被覆している。南側にも小型の箱形石棺(第3主体部)を隣接させて設置したとみられる。その後、埋葬施設の上部にさらなる水平積みの盛土を厚く施し、平坦面を造り出している。さらに北側に墳丘を拡幅して盛土を施し、最終的な成形を行っているようである。

よって、蛇迫第1号古墳では、地山を削り出して整地し(第1工程)、埋葬施設を設置する基底面を北側に増設して1基の木棺直葬墓と2基の箱形石棺墓を造営する(第2工程)。その後さらに水平積みの墳丘盛土を施し(第3工程)、北側に拡幅しつつ最終的な盛土で成形(第4工程)を行う。土提状盛土をとまなう「西日本の工法」は採用せず、埋葬施設を地山に設置した後に主要な盛土を行うことから、墳丘後行型となる。

三ツ城第1号古墳(第8図7、第9図11) 中期前半、集成編年6期(古瀬 1991)となる全長92mの前方後円墳である(石井・三枝編 2004)。墳丘の大部分は尾根を削り出して整形さ

れているが、後円部墳頂部・くびれ部西側墳丘・前方部墳頂部墳丘・前方部前面隅角部分では盛土による墳丘構築が認められる。前方部は真砂土や砂質土を重ねて締め固めることで雨水の侵入、墳丘の崩落を防ぐ工夫を凝らしたようである。前方部前面には粘質土を積み込んだ土嚢積み（第8図7）が施された可能性も指摘されている。尾根周囲の谷部も利用され、谷の中に版築状に土を盛り上げた土堤（周堤）を盛り、古墳のまわりに盾形ないしは長方形の平面プランの周溝を造り出していた。周溝に接する前方部の最下段の墳丘にも土堤と同様に版築状に土を積み上げる工法がみられる（石井・三枝編 2004）。後円部墳丘上面の埋葬施設の土層断面図（第9図11）からは、水平に堆積する墳丘盛土上から墓壇が掘り込まれていたことが確認された。

三ツ城第1号古墳のおおまかな墳丘構築手順としては、尾根の削り出し整形、周溝掘削、土堤（周堤）の構築を行い（第1工程）、土嚢積みなどによる墳丘下部の構築（第2工程）、墳丘中心部に水平積みを繰り返す盛土構築（第3工程）を施した後に、墓壇の掘込みと埋葬、封土成形（第4工程）を行ったことになろう。基底部に土嚢積み工法の採用がうかがえる。また、最上部の盛土を掘り込んで埋葬施設を埋設していることから、典型的な墳丘先行型であるといえる。

長者スクモ塚第1号古墳の墳丘構築について 以上少ない調査事例ではあるが、まとめておきたい。まず、古墳時代前期前半の西条盆地周辺の有力墓にはすでに墳丘外縁部に土堤状盛土がみられた。竪穴式石室の構築にあたっては墳丘中心部分に水平積みによる基底面の造成もみられた。

西条盆地周辺における墳丘構築と埋葬施設の設置の関係からみれば、古墳時代前期には小規模墳を中心にいまだに墳丘後行型や同時進行型が継続していたとすることができる。西条盆地の埋葬施設は弥生時代以来、断続的にはあれ、箱形石棺を継承していたことも起因しているものとみられる。箱形石棺は竪穴式石室に比べ、比較的小規模な基底面であっても墓壇の掘削から石棺設置、埋葬までが可能となろう。周堤を構築し、竪穴式石室の土台、基底面となる水平堆積層を造成せずとも埋葬施設の造営が可能となる墳丘構築であったとみることができる。つまり、墳丘外縁部の土堤状盛土と墳丘中心部の水平積み基底面は比較的大規模な竪穴式石室の構築に必要な土木工法とみられていたと考えることができる。

古墳時代中期前半の三ツ城第1号古墳では、箱形石棺を発展させた独自の埋葬施設ではあるものの、巨大墳丘の下層部分を土嚢積みや版築状の盛土施工を導入し、墳丘中心部では水平積みの盛土を施して墳丘先行型へと移行した。一方で、蛇迫第1号古墳のような10m級の小規模墳をみれば、古墳時代中期になっても土堤状盛土をとまなうような「西日本的工法」が採用されることはなかったといえる。

ひるがえって長者スクモ塚第1号古墳は、古墳時代前期後半、集成編年3～4期となる可能性が高い。全長60mに及ぶ墳丘規模からは当該時期の有力墓とみてよい。土堤状盛土による墳丘構築が想定されるものの、後円部の埋葬施設が箱形石棺であった場合、必ずしも墳丘先行型と断定できる状況にはないことがわかる。その場合、埋葬施設の土台となる水平積み

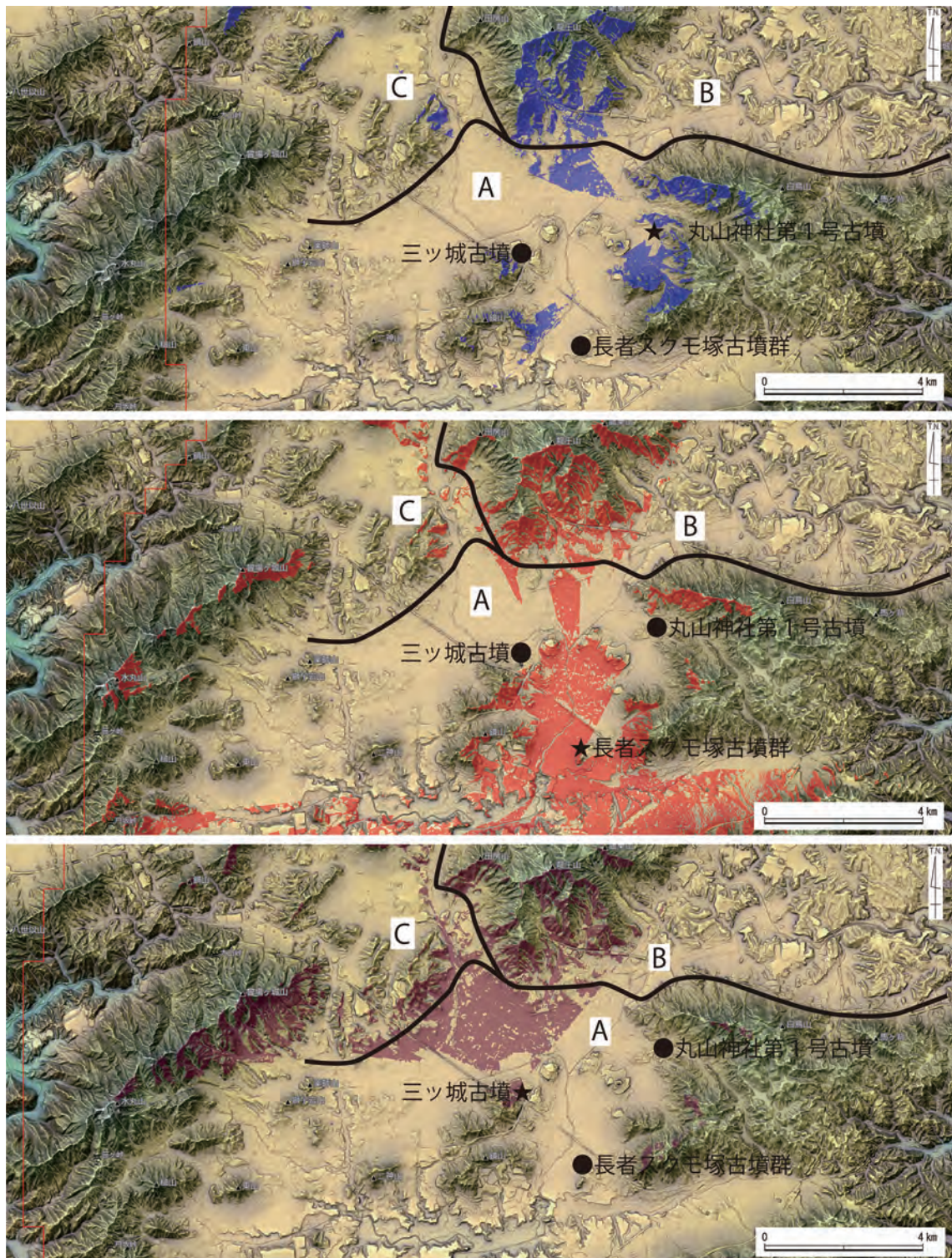
による基底面の造成もみられない可能性が少なからず見積もられよう。

先述したように、長者スクモ塚古墳群の造営前後となる原の谷古墳や藤が迫第1号古墳では、墳丘部分の周囲に土提状盛土を施した後、墳丘中心部を水平積みによる基底面を造り出しており、大型墓壙を構築する土木工法が導入されていたことは間違いない。しかし、その後の西条盆地における箱形石棺の盛行ぶり⁽¹¹⁾をみれば、墳丘構築に際して新たな土木工法を受容しつつも、竪穴式石室ではなく複数の箱形石棺を埋葬施設とする墳墓に回帰する転機があったかと思える。長者スクモ塚第1号古墳がそのどちらに属するのかを確認することは安芸地方の古墳文化を理解する一助になるといえる。(竹田・野島)

(3) 西条盆地における古墳と集落の空間的關係についての考察

西条盆地は3つの小盆地に区分でき、現行の行政区分上の西条地区(盆地A)、高屋地区(盆地B)、そして西条地区から北西方向にある小盆地(盆地C)に分けられる(第10図)。本稿の検討対象地域である西条地区(盆地A)には丸山神社第1号古墳、長者スクモ塚古墳群、三ッ城第1号古墳といった有力墓が確認されている。こうした古墳の評価の1つに、「古墳は人の往来が多く、注目を集める場所を選んで築造された」(都出 1989)という都出氏の提言があり、今なお重要な古墳の一認識として語られる(宇垣 2004、広瀬・和田編 2011)。こうした「往来」路を意識した古墳の築造を示す指標として古墳からの「眺望」がある。「眺望」とは「ある一地点から見渡すことのできる視認範囲と視認方向」であり、古墳が「元々の自然地形を変形させて、『あえて』その場所に築造」される点(寺村 2014)を考慮すると、古墳からの眺望には古墳を築造した主体の意識、つまり古墳をどの方向、地域に示そうとしたのかが表れていると考えられる。ここに前出の都出氏の提言を含めると、古墳からの眺望が展開する地域には、人の往来を確認することができると予測できる。同時にこれを担保するものとして、日常的に古墳を視認していたと想定される集落の存在がある。集落は人々の生活空間であり、こうした生活空間を繋ぐように往来路が形成されていたことは『日本書紀』の記述から遡及して推測できる⁽¹²⁾。要するに居住空間である集落の付近には往来路の存在を想定できるだろう。古墳からの可視範囲とその中に散在する集落の分布から古墳時代の往来路、ひいては律令期の古代道を推定していくことが本稿の目的であり、この中で西条盆地に築造された長者スクモ塚古墳群がどのような位置づけにあったのかを検討する。

ところで、古代律令期に設定された古代道は直線で起伏の少ない地域を通り、道幅も6m前後程、大きな所では10mになる所もあるとされている(木下 2009, 2013)。古代の道路は、1町×1町(109m×109m)の田地を単位とした条里制と呼ばれる土地区画に沿うように付設⁽¹³⁾されていた(島方編 2009)。おそらく律令期に突然整備されたわけではなく、それ以前の古代の往来路を参考にして設定されたと考えられる。こうした往来路の付近には古墳や神社、国分寺といった古代建造物が多く、往来路を臨むことができるのは前述の通りである(西別府 2011、木下 2013)。なお、西条盆地には切通しの痕跡などから古代道と比定される東西市街道路が確認されており、盆地Aから盆地Cに抜けていく形で古代道が敷設されてい



第10図 3つの古墳の眺望（可視範囲）

たことが指摘されている（木下 2002）。

上記の課題を達成するために、今回はカシミール3Dソフトを利用した。カシミール3Dは3次元の地図ソフトであり、ある一地点からの「眺望」を可視化することが可能である。以下では、①盆地Aの丸山神社第1号古墳、長者スクモ塚古墳群、三ッ城第1号古墳の3つ

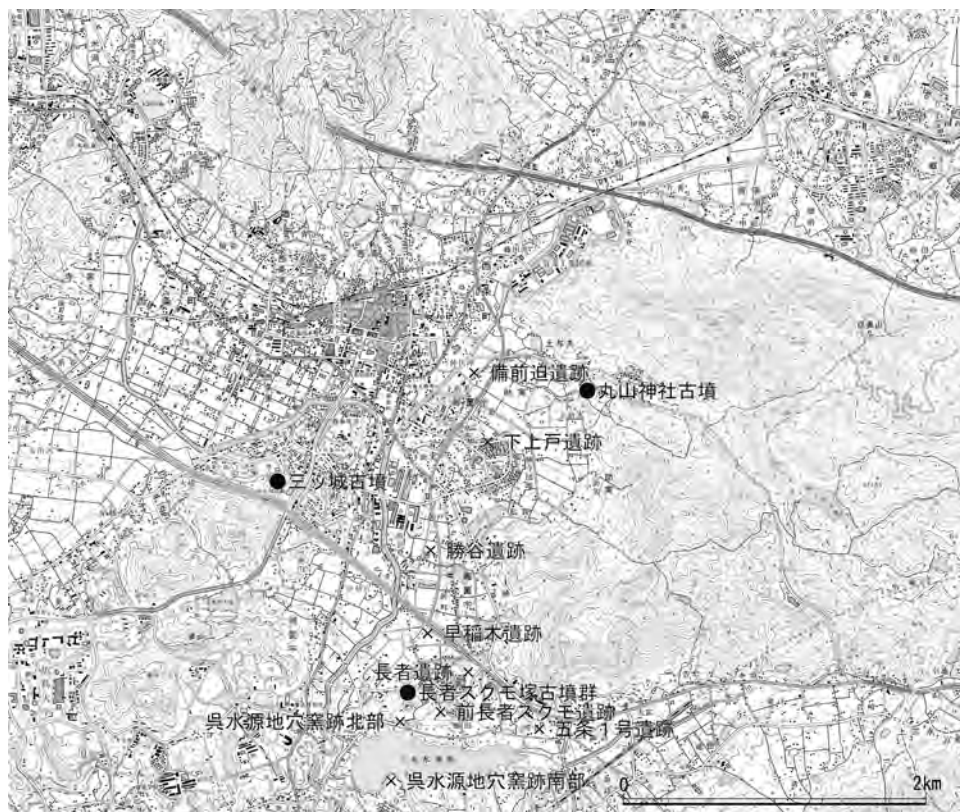


第11図 古墳時代前期・中期の集落遺跡 (1/50,000)

の古墳の可視範囲と、②各古墳からの可視範囲内に散在する集落の立地を確認し、③最後に①・②の検討をまとめて古代の往来路を推定していく。

まず、西条盆地に立地する丸山神社第1号古墳、長者スクモ塚古墳群、三ッ城第1号古墳の各古墳からの眺望を検討していく。丸山神社第1号古墳は、盆地Aの東縁を形成する龍王山を中心とした山塊を背後（東側）にとり、前方（西側）に展開する低丘陵に囲まれた平地に臨む様に立地する。標高は240～244m、水田面との比高差は約20mであり、前期末葉、集成編年4期に比定される（藤野 2015）。本古墳からの眺望は、背後の龍王山と前方の低丘陵に囲まれた地域（a）、および盆地A、B、Cが結節する地域（b）に展開する（第10図上）。続いて、長者スクモ塚古墳群の立地は第2節の通りであり、周辺には広く平地が展開している。実際にカシミール3Dを利用してみると、丸山神社第1号古墳と同じ盆地A北部の地域（b）の他、盆地A南部の東西方向（c）および、盆地A内を南北に横断する（d）という3つの眺望が展開する（第10図中）。三ッ城第1号古墳は、盆地Aの中央に位置する鏡山北側の尾根上に立地しており、標高は後円部頂部237m、前方部頂部235.5mで水田面との比高差は後円部頂部で6.3m、前方部頂部10.5mである（石井・三枝編 2004）。本古墳の眺望は、丸山神社第1号古墳および長者スクモ塚古墳群と同じく地域（b）と、盆地A、Cの結節点となる地域（e）に展開する（第10図下）。

次に、盆地A内の集落が前述の眺望範囲の中でどのように立地するのかを古墳時代以降に



第12図 古墳時代後期・奈良時代の集落遺跡 (1/50,000)

ついてみていく。まず、古墳時代前期前半を中心に営まれた集落としては、濱田遺跡・福原南遺跡・友松3号遺跡・横田1号遺跡・諏訪神社周辺遺跡・古市4号遺跡があり、眺望展開地域の(b)と(e)に立地する(第11図上)。長者スクモ塚古墳群や丸山神社第1号古墳などが築造される古墳時代前期後半から末葉ごろには周辺に集落遺跡を認めることができない。その後、眺望地域(d)に立地する松賀山遺跡が古墳時代中期前半から営まれ(第11図上)、中期中葉には古墳も築造されている(伊藤編1984)。古墳時代中期前葉、眺望地域(b)には石佛遺跡・是石遺跡・浄福寺遺跡が、眺望地域(e)には団子遺跡・助平2号遺跡・助平3号遺跡・古市2号遺跡などが営まれた(第11図下)。助平2号遺跡・助平3号遺跡・古市2号遺跡は三ッ城第1号古墳の近くに立地し、浄福寺遺跡ではミニチュア土器などの祭祀遺物が出土した。これらの遺跡には三ッ城第1号古墳との関連も指摘される(伊藤1984)。古墳時代後期には奥田遺跡が(b)地域に早稲木遺跡・前長者遺跡・長者遺跡が(c)地域にそれぞれ営まれ、奈良時代の遺跡として地域(b)には安芸国分寺、地域(c)に勝谷遺跡・五条1号遺跡などの集落遺跡、長者原窯跡・呉水源地窯跡といった窯跡、地域(d)に備前迫遺跡・下上戸遺跡が確認される(第12図)。とくに呉水源地窯跡は安芸国分寺の建立に関係があると考えられている(沢元・打田2007)。古墳時代前期・中期では、地域(b),(e)など盆地A北部を中心に集落は展開し、反対に(c),(d)といった盆地A南部では集落の展開が顕著ではない。しかし、古墳時代後期と続く奈良時代には(c),(d)といった地域に集落や窯跡などの人の生活の痕跡が多くみられるようになる。



第13図 推定される古代道 (1/50,000)

以上、ごく簡単に丸山神社第1号古墳、長者スクモ塚古墳群、三ッ城第1号古墳からの眺望の展開と、眺望が展開する地域に点在する集落遺跡の空間的な立地状況をみてきた。次にこれらの結果を統合し、古墳時代の往来路と律令期の古代道を推定していく。各古墳からの眺望は地域 (b)、つまり盆地A、B、Cが結節する地域で重なり、3つの古墳が築造される時期の集落の多くは (b)、(e) の地域に分布し、反対に地域 (a)、(c)、(d) には集落の分布が少ないことが確認された。このような眺望の重なりと集落の位置から、地域 (b)、(e) を中心として盆地A、B、Cを行きかう往来路への意識が強くうかがえる。こうした状況を踏まえると、古墳が築造された際には、盆地Aの北部を盆地B、Cの方向へと抜けていくパターンIの往来路が想定できる(第13図)。西条盆地に分布する前方後円墳は盆地Bから盆地Aへと移動していく様相がみて取れ、古墳時代を通して盆地B内には古墳や集落が多いという状況もこうした往来路の推定を補強する。

律令期になると、地域 (b) には安芸国分寺が建立され、地域 (b) が律令期の古代道においても重要な結節点であったことが推測される。また、地域 (c) や地域 (d) といった盆地Aの南部の隆盛も確認され、とくに長者スクモ塚古墳群の南方に位置する呉水源地窯跡から安芸国分寺建立に関する遺物が確認されていることは、物資の供給などの面において盆地A内を南北に貫くような人の動きを推測させる。盆地Aの南部側に集落や窯跡が営まれる一方で、広島県遺跡地図によると盆地B内では奈良時代以降の遺跡がそれほど確認されていない。また、古代山陽道についての最近の研究では、盆地Bは土地の起伏が激しいことが指摘され、三原市域に存在したとされる駅家の推定地(西別府 2002, 2011)を直線的に結んで、盆地Aの南部から北部へ斜めに横断するようなルートも推定されている。国分寺が地域 (b) に建立されること、盆地B内の集落の低迷に対して盆地A南部での隆盛がみられること、そして隆盛の起こった地域の窖窯と往来路の結節点に立地する国分寺が深く関係していることに加えて、盆地A、C間を抜ける切通の存在を考慮し、盆地A内で確認される条里⁽¹⁴⁾に沿わせると、奈良時代には盆地A、C間をつなぐ道路から地域 (b) を境に南方に折れ曲がるようにして盆地A南部と結びつくようなパターンIIの往来路が想定できる(第13図)。この往来路において、長者スクモ塚古墳群の立地する山塊が盆地Aの南北をつなぐ目印として意識されていたとも推測される。

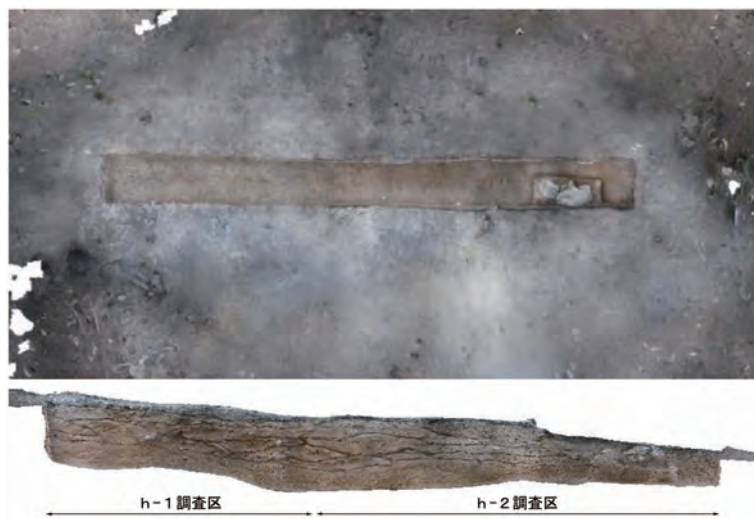
以上、西条盆地(とくに細分した盆地A)に立地する古墳の眺望から古代の往来路を推定してきた。本地域には広島県下最大の前方後円墳や安芸国分寺もあり、古代道の存在が長く指摘されてきたが具体的な古代道の姿は不明瞭であった。小稿では、古墳が往来路と密接な関係にあるという評価に端を発し、古墳の立地とそこからの眺望、および眺望内の集落立地から往来路を推定した。結果として、古墳時代の主要な往来路は直線的かつ起伏が少なめであるという律令国家中枢の道路意識に合わず、奈良時代には主要道路が変化した可能性を指摘した。盆地A北部に立地する丸山神社第1号古墳や三ッ城第1号古墳は、古墳築造当時の主要道路に近接していたが、律令期になると長者スクモ塚古墳群の立地する山塊を指標とした古代道が設定されたと考えられる。しかし、ここで問題になるのは、長者スクモ塚古墳群

は古墳築造時にもこうした目印としての役割を担っていたのかということである。本古墳築造当時、周辺には遺跡が少なく築造主体の本貫地を含め不明確な点が多いが、丸山神社第1号古墳や三ッ城第1号古墳と異なり、盆地Aの北部ではなく南部に立地することや他の2つの古墳よりも眺望の展開が広いことは古墳築造時にも注目されていたものと思う。(森木)

(4) h調査区における3D画像の作成

今回の発掘調査の目的の一つは、発掘されたh-1・2調査区の3Dモデルを試験的に作成することとした。そのため、h調査区清掃後、デジタルカメラ(ミラーレスカメラ〈CANON EOS KISS M, EF-M15-45mm F3.5-6.3IS STM〉、一眼レフカメラ〈NIKON D850, AF-S Micro Nikkor 60mm f/2.8G ED〉)を使用し、調査区を1時間程度撮影した。3Dモデル作成のための撮影には、調査区の全体と細部をそれぞれ画像として記録することが必要である。画像を合成する際に、撮影範囲の周囲に十分な重複部分を含むように撮影しなければならない。しかし、幅50cm程度のh調査区は細長いため、多くの画像を撮影する必要があり、撮影時に焦点が合わなくなることも多かった。そのため、調査区の対角線上の撮影を心掛けた。調査区の外形が大きい場合は、1枚の画像内の情報量が多いため、画像数が少なくなる。また、今回の撮影日は日差しが強かった為、傘やサンシェードを使って人工的に影を作り、壁面を常に湿らせておく必要があった。明暗差の補正処理は、Adobe Lightroomを使用し、jpgファイルに出力した。この画像をAgisoft Metashape(オーク社製)に取り込むと、2台のカメラで撮影した画像データがそれぞれ計算される。

まず、マーカーを設定し⁽¹⁵⁾、画像内の対象の接続部を合わせて点群を算出した。これをReconstruction Uncertainly, Reprojection Error, Projection Accuracy コマンドを使い、Gradual Selection でクリーンアップし、カメラ位置を最適化した。続いて、立体感のある点群、メッシュ、テクスチャーの計算を順次行った。上述の計算ステップを再度クリーンアップした後、3Dモデルにセクションを作成し、上・南・北・東・西の各方向からのオルソモザイク画像を計算し、jpgファイルでエクスポートした。さらに、完成した3Dモデルは、図解用



第14図 h調査区平面・西壁合成オルソ画像

にPDFファイルにエクスポートし、さらに加工用にOBJファイルとDAEファイルにエクスポートした。

3Dモデルの計算結果が良好であれば、より正確な測定が可能になるだけでなく、異なる断面の非常に詳細なオルソモザイク画像を作成し、さらなる研究にも活用することができる⁽¹⁶⁾。

h-1・2調査区の形状は

リアルに再現できたが、調査区の幅が狭かったため、完全に誤差のないテクスチャーを算出することは困難であった。(Rac)

7. おわりに

冒頭にもみたように、長者スクモ塚古墳第1号墳は発見当初、円墳と考えられていたが、方形台状部の存在から帆立貝形前方後円墳とされ、古墳時代中期以後に築造されたものとみなされてきた。一方で、以前は第3号古墳とされた隣接古墳の埋葬施設の箱形石棺から、古墳時代前期末葉に想定しうる副葬品の出土が伝えられていた。その後、第1号古墳の円筒埴輪などの再検討が行われ、古墳時代前期末葉から中期初頭の可能性が指摘されることとなった(古瀬 1991、下江・永野・藤澤 2018)。

このたび、第2号古墳に引き続き、第1号古墳の発掘調査を開始した。墳丘測量時、およびそれ以前に表採されていた埴輪片に加え、あらたに出土位置が明らかな埴輪片を得ることができた。突出した突帯をもつ大型の円筒埴輪片には円形透孔がみられないことや、タテハケが主体となる器面調整からすれば、当該古墳の築造開始時期が古墳時代前期後半、4世紀中葉から後葉にまで遡るとみることも可能となった。

しかし、今回のような小規模なトレンチ調査では、円筒埴輪樹立状況やその配列位置などといった具体的様相を明らかにすることはできなかった。このため、今後、h-2調査区で検出した埴輪付近にさらなる調査区を設定し、円筒埴輪樹立痕跡とその配列状況を確認することとしたい。さらには墳丘の構築方法、埋葬施設の遺存状況などを明らかにし、西条盆地における首長墓系列の実相を解明していくこととしたい。

今回の概要報告は2020年度の野外考古学実習授業における遺構確認、土層断面観察・実測、写真撮影をもとにした。長者スクモ塚古墳群における調査研究は継続中ではあるが、広島県教育委員会文化財課の村田晋氏とともに出土埴輪の再検討を試みた学生諸氏の意向もあり、第1号古墳の調査経過の報告を行った。長者スクモ塚第1号古墳の発掘調査を実施するにあたっては、村田晋氏にさまざまなご教示をいただいた。また、東広島市出土文化財管理センターの妹尾周三(現廿日市市教育委員会)・中山学・石垣敏之・津田真琴の各氏には発掘調査に関してご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい。

なお、本研究報告は『古墳時代の首長墓系列に関する地域研究』と題する科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号19K01096(研究代表者:野島 永))による調査研究成果の一部である。第1・7節は野島と有松、第2節・第6節(3)は森木、第3節は竹田、第4節(1)・第5節・第6節(1)は小出来、第4節(2・3)は宇野、第6節(2)は竹田と野島、第6節(4)はラックがそれぞれ執筆し、野島が全体の文体を調整した。

(野島・有松)

註

- (1) 第2～4次調査では、長者スクモ塚第2号古墳の墳丘構造および埋葬施設の確認を行った。第2～4次調査の概要については、本誌「東広島市長者スクモ塚第2号古墳発掘調査報告（第2～4次調査）」を参照いただきたい。なお、第5次調査の参加者は調査担当の野島永・有松唯の他、以下の通りである。

第5次調査（2020年度）

エバーハルト・カール大学チュービンゲン 大学院生：RAC, CARMEN

広島大学学部生：宇野真太郎・小出来恒平・小西 文・佐々木皓亮・竹田千紘・森木 琉・岸戸康記・長崎 駿・船越雅子・高田美玖・村上未紗

- (2) 「有力墓」とは、当該地域において墳丘規模や埋葬施設、副葬品などの古墳の諸属性が他の埋葬施設に比べて相対的に優位と考えられる古墳を便宜的に指す（下垣 2017、下江・永野・藤澤 2018）。なお、古墳の時期比定は調査報告文献等に記載された年代観の再検討を経て、相対年代に揃えとともに「集成編年」（広瀬 1991）を併用した。
- (3) 近年では、国土地理院が公開している傾斜量図を用いた調査の結果、福山市神村町で墳丘長90～100mの前方後円墳と推測される厳島神社古墳が確認されている（藤原 2018）。
- (4) 便宜的に前方部側を「南」側、後円部側を「北」側と呼称した。つまり、調査区の北東側壁面を「北壁」、調査区の南西側壁面を「南壁」とした。
- (5) 東広島市出土文化財管理センター（東広島市教育委員会）との協議の結果、煩雑さを避けるため、同一年度内の発掘調査（野外考古学実習A・B、およびC）を一調査単位として、調査次数を付した。
- (6) 円筒埴輪底部が確認できていないため埴輪基底部かどうかは不明であるが、埴輪の掘形が確認されたため、原位置を保っているものと考えてよい。
- (7) 春季調査で検出された礫周辺においてピンポールを使用して地中探査を行った。その結果、トレンチ内の礫に連続する石列が南北方向に確認できた。ここでは列石状を呈しているとしておく。
- (8) 広島県教育委員会文化財課の村田晋氏よりご教示をいただいた。記して感謝したい。
- (9) 土囊積み工法とは、列状あるいは放射状に土囊・土塊列を並べ、列間に盛土する工法とする（青木 2003、43頁）。
- (10) 本誌「東広島市長者スクモ塚第2号古墳発掘調査報告（第2～4次調査）」を参照いただきたい。
- (11) 三ツ城第1号古墳といった大規模古墳から中小のいわゆる在地系古墳まで、箱形石棺系の埋葬施設に収斂することから、当該地域においても地域古墳群の自立的なアイテムの発現を前期後葉前後から中期前半に読み取ることができる（岩松 2021）。
- (12) 「① 臥死路頭。於是、路頭之家、乃謂之曰、何故使人死於余路、（中略）② 復有被役之民、路頭炊飯。於是、路頭之家、乃謂之曰、何故任情炊飯路頭」（『日本書紀』大化二年三月二十二日条）。（大意：① 路付近の家の者が路頭に死体を放置した者を咎める。② 路付近の家の者が路頭で食事を摂ることを咎める。）
- (13) 条里地割は1町×1町の田地が連続するようにして土地を区画するものだが、こうした縦横109mほどの区画を越えて120mほどに区画が拡張している場合、約10m（30尺）の余剰分を余剰帯と呼び、ここに古代道が通っていたとされる。
- (14) 条里の設定については、国土地理院がインターネットにあげている1974年から1983年までに撮影された盆地Aの航空写真に写っている田地を約109m幅で区切った。
- (15) ここで重要なのは、マーカーの配置をコンピュータに理解させるために、多くのマーカーが一つの画像内に表示されていなければならないため、適切な撮影画像が必要となる。
- (16) 例えば、プロファイル断面の描画テンプレートとして利用することもできる。

挿図出典

第1図 国土地理院ウェブサイト画像を改変して作成。第2～7図 調査者作成。第8図 次の文献の挿図を一部改変して掲載。1. 出野上 2003文献第4図、2～5. 調査時実測図から作成、6. 恵谷 2005文献第5図、7. 石井・三枝編 2004文献第34図。第9図 8～10. 調査時実測図から作成、11. 石井・三枝編 2004文献第41図（一部改変）。第10図 カシミール3Dを使用して森木作成。第11～13図 森木作成。第14図 ラック作成。

引用・参考文献

- 青木 敬 2003 『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房。
- 青山 透 1992a 「古市4号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I、東広島市教育委員会、37～50頁。
- 青山 透 1992b 「助平3号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I、東広島市教育委員会、51～80頁。
- 青山 透 1993 「助平2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II、東広島市教育委員会、3～77頁。
- 青山 透・梅本健治 1999 「胡麻5号遺跡」「胡麻4号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡』I、広島県埋蔵文化財調査センター、101～228頁。
- 阿賀岡希子・長石紀子 1999 「西本2号遺跡」『西本2、3・4、7号遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第24冊、東広島市教育文化振興事業団、6～10頁。
- 石井隆博 1992 「古市1号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I、東広島市教育委員会、7～12頁。
- 石井隆博 2006 「前長者遺跡」『前長者遺跡発掘調査』東広島市教育委員会文化財調査報告書第35集、東広島市教育委員会、4～12頁。
- 石井隆博・三枝健二編 2004 『史跡 三ツ城古墳発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第42冊、東広島市教育文化振興事業団、194～202頁。
- 出田和久 2016 「糸里地割と道路」『日本古代の交通・交流・情報』3、吉川弘文館、148～177頁。
- 出野上 靖 2003 『原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第37冊、東広島市教育文化振興事業団。
- 伊藤健司 1984 『浄福寺遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会、8～9・22～24頁。
- 伊藤健司編 1984 『松賀山遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会、14～16頁。
- 今尾文昭 1987 「高地・丘陵・低地の前期古墳と地域性」森 浩一編『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会、236・237・242～246頁。
- 岩松 保 2021 「畿内系古墳と在在系古墳から見た丹後社会」『京都府埋蔵文化財論集』第8集－創立40周年記念誌一、京都府埋蔵文化財調査研究センター、113～126頁。
- 植田千佳穂 1983a 「助平1号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)、広島県埋蔵文化財調査センター、85～92頁。
- 植田千佳穂 1983b 「助平2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)、広島県埋蔵文化財調査センター、93～162頁。
- 宇垣匡雅 2004 「古墳の立地とはなにか」広瀬和雄・岸本道昭・宇垣匡雅・大久保徹也・中井正幸・藤沢敦編『古墳時代の政治構造－前方後円墳からのアプローチ－』青木書店、157～159・164～171頁。
- 梅本健治編 2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(29)、広島県教育事業団。

- 恵谷泰典 2005 『蛇迫第1～4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 大上裕士 1993 「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』IX、広島県埋蔵文化財調査センター、19～44頁。
- 川尻 真・沖田健太郎編 2015 『甲立古墳 一発掘調査報告書一』安芸高田市教育委員会。
- 河瀬正利 1971 「藤が迫遺跡群 第1号古墳」『広島県文化財調査報告』第9集、広島県教育委員会・広島県文化財協会、61～85頁。
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1～70頁。
- 木下 良 2002 「地表に残る古代痕跡」『古代山陽道を探る』東広島市教育委員会編、1～12頁。
- 木下 良 2009 『日本古代の道と駅』吉川弘文館、260～264頁。
- 木下 良 2013 『日本古代道路の復元的研究』吉川弘文館、1～15・267～345頁。
- 佐々木直彦・松村昌彦 1993 「助平3号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、広島県埋蔵文化財センター、170～181頁。
- 沢元保夫・打田知之 2007 『三永水源地穴窯跡詳細分布調査報告書』東広島市教育文化振興事業団、8～22頁。
- 島方洗一編 2009 『地図でみる 西日本の古代 律令制下の陸海交通・条里・史跡』平凡社。
- 下江裕貴・永野智朗・藤澤昌弘 2018 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、41～70頁。
- 下垣仁志 2017 「首長墓系譜論の展開」『畿内の首長墳』平成25～28年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書、立命館大学文学部、605～656頁。
- 都出比呂志 1989 「古墳が造られた時代」都出比呂志編『古墳時代の王と民衆』古代史復元6、講談社、9頁。
- 寺村裕史 2014 『景観考古学の方法と実践』同成社、11～15・100～105頁。
- 中塚 良 1989 「首長墓系譜の立地分析 一京都府山城地域・亀山盆地を例に一」歴史地理学会編『盆地の歴史地理』古今書院、51～82頁。
- 永野智朗 2018 「東広島市長者スクモ塚第2号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、71～86頁。
- 永野智朗 2019 「広島県」『中期古墳研究の現状と課題』Ⅲ、～埋葬施設の形式・構築方法・儀礼の地域的展開と被葬者像～ 発表要旨集、中国四国前方後円墳研究会、68～78頁。
- 西川修一 1991 「弥生の路・古墳の路 一神奈川の場合一」『古代』第92号、263～289頁。
- 西別府元日 2002 「芸備の古代道路を探る」『古代山陽道を探る』東広島市教育委員会、29～40頁。
- 西別府元日 2011 「備後国西部の古代山陽道 ～考察にかえて～」『トントン古道跡』広島大学大学院人文科学部、13～27頁。
- 濱岡大輔 2020 『前長者遺跡発掘調査報告書』2、広島文化財センター。
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、24頁。
- 広瀬和雄・和田晴吾編 2011 『古墳時代』上、青木書店、3～20頁。
- 廣瀬 覚 2003 「柳井茶臼山古墳の埴輪とその生産組織 一異系統埴輪共存の意義をめぐって一」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2、立命館大学考古学論集刊行会、657～678頁。
- 廣瀬 覚 2010 「近畿における前期古墳の埴輪 一西日本への展開を視野に一」『円筒埴輪の導入とその面期』中国四国前方後円墳研究会、1～20頁。
- 藤岡孝司 1993 「大槇第1号古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ、東広島市教育委員会、78～90頁。
- 藤野次史 2015 「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、97～134頁。
- 藤原好二 2018 「傾斜量図による前方後円墳の確認」『中四研だより』第42号、中国四国前方後円墳研究会。

4～7頁。

- 古瀬清秀 1991 「安芸」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編、92～94頁。
- 古瀬清秀編 2010 『千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室。
- 松木武彦 2000 「古墳時代首長系譜論の再検討 ―西日本を対象に―」『考古学研究』第47巻第1号、考古学研究会、101～108頁。
- 松崎寿和 1979 「古墳時代」『広島県史』考古編、広島県、424・436頁。
- 道上康仁・山田繁樹 1985a 「大槓3号遺跡」『大槓遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター、108～111頁。
- 道上康仁・山田繁樹 1985b 「大槓2号遺跡」『大槓遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター、17～33・111～113頁。
- 村田 晋 2018 「広島県」『中期古墳研究の現状と課題』Ⅱ、～古墳時代中期の交流～ 発表要旨集、中国四国前方後円墳研究会、71～75頁。
- 安川 満 2018 「岡山県」『中期古墳研究の現状と課題』Ⅱ、～古墳時代中期の交流～ 発表要旨集、中国四国前方後円墳研究会、55～70頁。
- 和田晴吾 2009 「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』152集、国立歴史民俗博物館、247～272頁。

第1表 長者スクモ塚第1号古墳土層観察表

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第2層	暗褐色土	7.5YR3/4	弱	弱	上面は表土(腐植土)による有機質浸食を受ける。	自然堆積土
第3層	暗褐色土	10YR3/4	なし	やや弱	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を5%含む。	流出土
第4層	褐色土	10YR4/6	やや弱	弱	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を2%含む。	盛土
第5層	褐色土	7.5YR4/6	やや弱	弱	砂質土をベースとし、5mm以下のクサリ礫を5%含む。地山(花崗岩パイラン土)に近い。	盛土
第6層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	強	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を15%含む。花崗岩パイラン土。	地山
第7層	明褐色土	7.5YR5/6	なし	やや強	砂質土をベースとし、3mm程度のクサリ礫を5%含む。	盛土
第12層	褐色土	7.5YR5/6	やや強	やや強	砂質土をベースとし、10mm以下のクサリ礫を7%含む。	流出土
第15層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	やや強	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を5%含む。	流出土
第19層	褐色土	7.5YR4/6	なし	やや強	砂質土をベースとし、3mm程度のクサリ礫を5%含む。地山(花崗岩パイラン土)に近い。	盛土
第20層	明褐色土	7.5YR5/6	なし	やや強	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を7%含む。地山(花崗岩パイラン土)に近い。	盛土
第21層	明褐色土	7.5YR5/6	なし	強	砂質土をベースとし、10mm以下のクサリ礫を3%含む。地山(花崗岩パイラン土)に近い。	盛土
第22a層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	なし	やや強	砂質土をベースとし、10mm以下のクサリ礫15%を含む。	流出土
第22b層	明褐色土	7.5YR5/6	弱	やや強	砂質土をベースとし、4mm以下のクサリ礫を10%含む。	流出土
第23層	黄褐色土	10YR5/8	弱	やや強	砂質土をベースとし、8mm以下のクサリ礫を20%含む。	流出土
第24層	鈍い黄褐色土	10YR6/4	弱	やや弱	花崗岩パイラン土。	地山
第25層	褐色土	7.5YR4/3	なし	やや弱	砂質土をベースとし、4mm以下のクサリ礫を4%程含む。	流出土
第26層	褐色土	7.5YR4/6	なし	やや強	砂質土をベースとし、5mm以下のクサリ礫を15%程含む。	盛土
第27層	明褐色土	7.5YR5/6	やや弱	やや弱	砂質土をベースとし、3mm以下のクサリ礫を1%程含む。	盛土
第28層	褐色土	7.5YR4/3	なし	やや弱	砂質土をベースとし、4mm以下のクサリ礫を5%程含む。	流出土
第29層	鈍い黄褐色土	10YR4/3	やや弱	弱	砂質土をベースとし、3mm以下のクサリ礫を5%程含む。	流出土
第30層	褐色土	10YR4/6	なし	弱	砂質土をベースとし、5mm以下のクサリ礫を7%程含む。	整地土
第31層	褐色土	7.5YR4/6	やや弱	弱	砂質土をベースとし、5mm以下のクサリ礫を10%程含む。	整地土
第32層	褐色土	7.5YR4/4	やや弱	弱	砂質土をベースとし、7mm以下のクサリ礫を10%程含む。	置土
第33層	褐色土	10YR4/6	やや弱	弱	砂質土をベースとし、3mm以下のクサリ礫を2%程含む。	置土
第34層	褐色土	10YR4/6	やや弱	やや強	砂質土をベースとし、5mm以下のクサリ礫を1%含む。	流出土
第35層	褐色土	10YR4/4	なし	やや弱	砂質土をベースとし、10mm以下のクサリ礫を7%程含む。	整地土
第36層	黄褐色土	10YR5/8	なし	やや弱	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を3%程含む。	整地土
第37層	褐色土	7.5YR4/6	なし	やや弱	砂質土をベースとし、10mm以下のクサリ礫を2%程含む。	整地土
第38層	褐色土	10YR4/6	やや弱	弱	砂質土をベースとし、5mm以下のクサリ礫を2%含む。	整地土
第39層	褐色土	10YR4/4	なし	弱	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を5%程含む。	整地土
第40層	褐色土	10YR4/6	なし	やや弱	砂質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を2%程含む。	整地土
第41層	褐色土	7.5YR4/4	弱	弱	砂質土をベースとし、8mm以下のクサリ礫を10%程含む。	埴輪内堆積土

第2表 長者スクモ塚第1号古墳表採・出土遺物観察表

掲載 表採・ 番号 出土地点	種類	器種	部位	法 量		調 整		色 調		備 考
				器 高 [現存値]	口径・底径 [復元値]	外 面	内 面	外 面	内 面	
1 h-1調査区	土師器	不明	胴部	[3.3]				10YR6/6	10YR6/6	SSK112
2 h-1調査区	土師器	不明	口縁部	[2.1]	[17.1]		ナテ	10YR8/6	10YR8/6	SSK119
3 不 明	埴輪	円筒	底部	[6.5]	[29.2]	ヨコナテ	クスリ・ヨコナテ	10YR8/4	10YR8/6	SSK19「ス-27」 (過去に表採) 下江ほか2018 文献第7図13
4 不 明	埴輪	円筒	底部	[7.5]	[35.0]	クスリ・ナテハ ケ・ヨコナテ	オサエ・クスリ	10YR7/4	10YR8/4	SSK18「ス-4」 (過去に表採) 下江ほか2018 文献第7図15
5 不 明	埴輪	円筒	胴部	[4.1]		ナテ	ナテ	5YR7/8	5YR7/8	SSK71・72接合 (過去に表採) 下江ほか2018 文献第7図14
6 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[16.0]			オサエ・クスリ・ナテ	5YR6/8	5YR7/6	SSK159
7 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[11.0]		タテハケ・ナテ	オサエ・クスリ・ナテ	2.5YR6/8	2.5YR5/8	SSK150
8 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[10.3]		ナテ	オサエ・クスリ・ナテ	10YR7/4	10YR7/4	SSK152
9 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[5.2]		タテハケ・ナテ	ナテ	7.5YR7/8	7.5YR7/8	SSK153
10 第2号古墳 南西墳丘裾	埴輪	円筒	突帯	[2.2]				7.5YR4/6	7.5YR4/6	SSK105
11 h-1調査区	埴輪	円筒	突帯	[2.5]				10YR7/8	10YR7/8	SSK116
12 h-1調査区	埴輪	円筒	突帯	[2.3]		ナテ		10YR7/6	10YR7/6	SSK110
13 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[5.3]		クスリ・ナテ	クスリ・ナテ	7.5YR7/6	7.5YR6/6	SSK146
14 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[4.5]		オサエ・ヨコナテ	オサエ・ヨコナテ	10YR6/4	10YR7/4	SSK135
15 h-1調査区	埴輪	円筒	胴部	[5.9]			クスリ	10YR7/4	7.5YR7/6	SSK117
16 h-2調査区	埴輪	円筒	胴部	[9.5]		オサエ・ヨコナテ	オサエ・クスリ・ヨコナテ	10YR6/4	10YR6/4	SSK137
17 h-1調査区	埴輪	円筒	胴部	[6.5]			オサエ	10YR6/4	10YR6/4	SSK108
18 h-2調査区	埴輪	円筒	底部	[2.6]	[11.1]			10YR6/4	10YR6/4	SSK139
19 h-2調査区	埴輪	朝顔形	口縁部	[7.8]				10YR7/8	10YR7/8	SSK162

Excavation Report Chōja-Sukumozuka Kofun No. 1, Higashi-Hiroshima City, Hiroshima Prefecture (5th Campaign)

**Hisashi NOJIMA, Yui ARIMATSU, Shintaro UNO, Kohei KODEKI,
Chihiro TAKEDA, Ryu MORIKI, Carmen RAC**

The Chōja-Sukumozuka mounded tomb group (*kofun gun*) is located in Saijō-chō (Saijō Basin), Higashi-Hiroshima City, Hiroshima Prefecture, Japan. It consists of three burial mounds, but one (No. 3) has disappeared. After the initial survey, the Laboratory of Archaeology at the Hiroshima University conducted an excavation of mounded tomb No. 1 in 2020 to determine the composition of ceramic funerary sculptures (*haniwa*) placed on the mounded tomb, the setup location and the date of the mound construction. The survey revealed cylindrical *haniwa* (*entō haniwa*) and pebbles at the burial mound no. 1. In addition, due to the date of the excavated cylindrical *haniwa*, it may be assumed that the mounded tomb was built in the middle to last third of 4th century AD.

Considering the method of construction of the mounded tombs in the Saijō Basin, we can find that even chiefly mounded tombs, which had box-shaped stone coffins (*hakogata sekkan*) in 4th century AD, were the “mound last” type of mounded tombs (mound construction is carried out at the end) or the “concurrent progression” type of mounded tombs (construction as a result of repeated burial and backfill operations).

The unearthed *haniwa* exhibit differences concerning size, clay, and the shape of protruding clay bands, and it is possible that this reflects the aesthetic and/or ideological differences among the manufacturer's groups.

In addition, it is thought that this mounded tomb could easily attract people's attention owing to its location and panoramic views. From this point on one might infer ancient roads.

長者スクモ塚第1号古墳

図版第1



a. 長者スクモ塚第1号古墳 g 調査区全景（西から）



b. 長者スクモ塚第1号古墳 g 調査区東壁土層堆積状況（北西から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第2



a. 長者スクモ塚第1号古墳g調査区壁面実測状況（北東から）



b. 長者スクモ塚第1号古墳h調査区壁面実測状況（北から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第3



a. 長者スクモ塚第1号古墳h調査区全景（南から）



b. 長者スクモ塚第1号古墳h-1調査区南壁土層堆積状況（北東から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第4



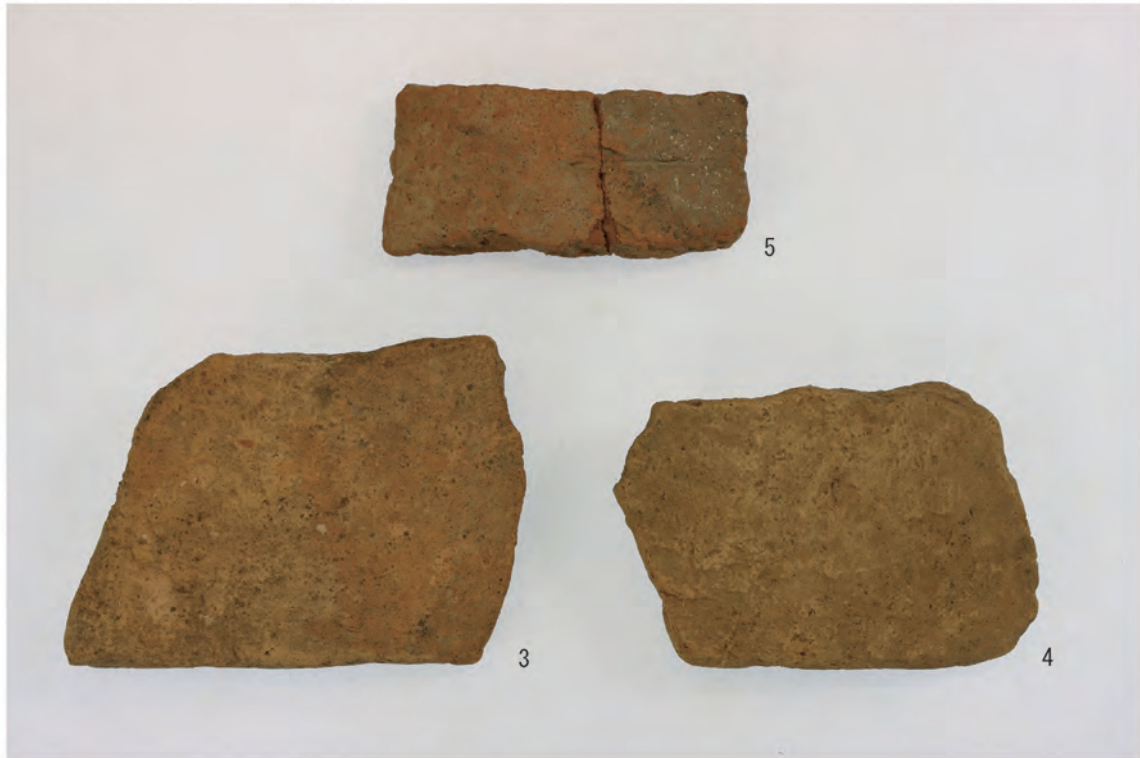
a. 長者スクモ塚h-2調査区礫・埴輪検出状況（南西上から）



b. 長者スクモ塚h-2調査区北壁埴輪検出状況（南西から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第5



a. 長者スクモ塚第1号古墳表採埴輪



b. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物(1)

長者スクモ塚第1号古墳

図版第6



a. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物（2）



b. 長者スクモ塚第1号古墳出土遺物（3）